

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
 大学院生研究
 2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学 研究科	比較文明学 専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学研究科・教授		春原 憲一郎 印		
自然・人文の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同 名
研究課題名	台湾日本語文芸の研究——日本統治期以後の営みについて				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・比較文明学専攻・博士後期課程・5年		今井 祥子 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2007 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

台湾において日本語文芸は、日本による領有以後、その担い手を変えながら、市井の人びとの「趣味」という位置に定着し営まれてきた。本研究は、そのような台湾日本語文芸のなかでも、日本統治期以後の台湾社会に存在する、台湾の人びとによる、日本語短詩型文芸(短歌、俳句)の営みについて調査、考察を行うものである。本研究の問題関心は、このような営みをどのようなものとして位置づけることができるのか、或いはどのような語りがありうるのかという点に集約される。文献研究と現地調査によって取り組まれる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[台湾] [日本語文芸] [営み]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究においては、個々具体的な事例を踏まえた上で、日本による植民地統治終焉後の台湾における日本語による営みはどのようなものとして位置づけうるのか、或いは今日の日本社会という場からそれらに対してどのような知覚の様式、語りがありうるのかといった点が課題として集約される場所であった。こうした課題にとって、近年のポストコロニアル研究の手法およびそれに対する批判的思考についての検討は基礎的作業となる。

「植民地主義の遺産」をめぐって

日本においては詩人の大岡信の紹介により 1990 年代半ばの一時期に〈台湾万葉集〉としてその存在の一端がメディアを通じて広く知られたものの、それはあくまで学術研究の領域外のものであった(今井 2008)。台湾日本語文芸、なかでも本研究が検討する「趣味」としての短歌や俳句の営みという「文学研究」の領土の外とされてきたものにかんする本格的な取り組みは 2000 年以降になってからとあってよい。こうした漸次的な変化は、「文学研究」の領土性が揺らいだためのものではなく、学術領域におけるポストコロニアルというパースペクティブの受容や、旧植民地(台湾、韓国)社会における民主化の進展といった動きにかかわるものである。「自国史」の見直しとその再構築という社会的欲求、目的の下に「植民地主義の遺産」は否認や黙殺の対象であることから解かれ「発見」されだしている(一例として、李郁恵 2002、黄智慧 2003、ユエン 2006、李建志 2007、鄭百秀 2007、等)。

日本統治期以後の台湾社会に存在する、台湾の人びとによる、日本語短詩型文芸(短歌、俳句)の営みがどのようなものとしてあるのか——。ポストコロニアル研究というレベルにおいてそれは、「植民地主義(コロニアリズム)の遺産」をどのように評価するか——と翻訳される。つまり本研究の課題は、「植民地主義の遺産」をいかに知覚するかという、ポストコロニアル研究の基本的問題機制にも関わっている。さらにそれは「ポストコロニアル」という、いま生きる場である空間において、歴史的、今日的コロニアリズムをいかに知覚するかという問題にも関わっている。

以下、「植民地主義の遺産」へのアプローチ(意味づけや関心、知覚、語り)のありようとそれらに孕まれる諸問題について、本研究も包摂されうるポストコロニアル研究にみてゆき、検討をおこなう。(※本報告書ではそのうちの一部を載せる)

1、ポストコロニアル研究における「主体の視界」

抑圧や制度に対する「抵抗」や「戦略」、「揺るがし」など、近年のポストコロニアル研究は植民地化/周縁化された人々(の営為)を主体(性)の強調において語り、その生を意味づけ、評価している(ベクトルは違えど「悲劇」や「自己植民地化」といった形容も同様に「他者」の他者たるところである不透明性を無視する透明化=同一化による捉えといえるかもしれない)。こうした「コロニアリズムの遺産」への態度には、政治的実践という一面もあるが、同時に批判的検討の余地もある。大杉高司(1999)は、植民地化された者たちをみずからの歴史の主体に立ち戻らせるためにポストコロニアルな歴史の書き直しを「彼ら」の名において行うことは、ポストコロニアル批評家の政治意識=主体性に「彼ら」の「隠された意図=内実」を収斂させようとする目的論的行為であると言い、「主体」のことば(抵抗、戦略等)で括ってしまうことを絶えず先延ばしにする必要を説いている。そのようにして「非同一的」なるもの相互の関係性が要請する倫理を無視し「他者=客体」を「主体」のモデルに従って構築しつつそれを操作や支配の対象に貶めてきたものこそが(ポストコロニアル研究が本来意識的であるはずの)植民地主義の認識論であるという指摘は、その「他者」観に連なるものである。「他者」は「透明化=同一化」を逃れ出るものであり、ゆえにそれは常に遅れて語るほかない。大杉は、「主体」が「他者」について抱く像に「他者」を封じ込めてしまうところである「ポストコロニアル」の世界には、厳密な意味での「他者」はいないと述べる。

研究成果の概要 つづき

2、ポストコロニアルにおける「消えゆかないもの」

ポストコロニアル研究において植民地主義の認識論がみてとれるという指摘は、それがまさに偏在するものであることを示しているのではないだろうか。酒井直樹(2002)は、植民地主義がもたらした痕跡のなかで「一番どうしても消えゆかないもの」として「植民地支配者という同一性と植民地被支配者という同一性の対比そのもの」を挙げる。例えば「日本人対韓国、朝鮮人という対比でおのおのの同一性を確定しようとする限り、ポストコロニアリズムの歴史は必ず蘇ってくる」。そのような「二項対立あるいは二つの社会的位置、そして両者の間の区分が作り上げてくる対称的な同一性」はクロノロジカルな秩序のなかに収まるものではないとも言う。それはポストコロニアルの形態としてもっとも基底的なものといえる。そしてそれを残存させる様態・媒介として「空想」が指摘されるのだが、このような「植民地主義の遺産」がどのような仕方残存していくのかに対する強力なアプローチとなるものこそがポストコロニアリズムというものであるという酒井のことばは、「われわれ」のポストコロニアル研究のあり方に今一度の確認を迫ってくる。酒井においてはポストコロニアル研究は「植民地主義によって被害にあった人々ではなく、植民地主義の機構が隠蔽されている限りで自己の矜持を保つことのできるようになった人々、植民地主義の暴力が正確に暴かれることによって自らの矜持を失わざるを得ない人々について研究する学問」とされる。上水流久彦(2006)が戦後台湾社会の「日本語」を扱う今日の諸研究のなかに見いだしている二項対立図式に基づく植民地主義的認識(「日本」という要素のみ「台湾」を規定しようとする)は、「植民地主義に基づく空想を編年的な秩序のなかに固定できない」ことの例示であるかのようである。ここにおいて、その場が「客体」に対する「主体」の意志の戦場と化す(脱領土化ではなく再領土化となる)恐れや、二項対立に基づく同一性の対比による他者(性)の喪失の可能性という「ポストコロニアル」世界の基底的問題、思想的課題が再度確認された。

3、「遅れ」て眺める

大杉は、すでに生きられている文化に対する「遅れ」の引き受けを言う。日本統治期以後の台湾日本語文芸の営みは一般に「ポストコロニアル(文学)」、或いは「クレオール(文学)」「日本語文学」等にカテゴリー化される傾向にあるが、実際それらにおいて称揚され期待される新たな像(型)にどのくらい合致しているであろうか。しかしながら、そうした先行する眺めに映っているであろう凡庸さや旧態さ保守性を否定的にみるべきではない。「遅れ」て語るとは生成されてきたもの語ることであり、それらの堆積によって共同性を帯びる局面に焦点を合わせることを意味するという。例えば、規範的かつ単調な繰り返しに見えるその「制作 poiesis」がいかにく<生>と結びついているのかは「遅れ」て語ることによってしかみえてこない。

今井祥子 2008/3 「届くという遂行——日本語による営為の一面」立教比較文明学会編『境界を越えて』第8号。

大杉高司 1999/3 『無為のクレオール』岩波書店。

上水流久彦 2006/3 「自画像形成の道具としての「日本語」——台湾社会の「日本」を如何に考えるか」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における「日本」』風響社。

黄智慧 2003/3 「ポストコロニアル都市の悲情——台北の日本語文芸活動について」橋爪紳也編『アジア都市文芸学の可能性』清文堂出版。

酒井直樹 2002/5 「ポストコロニアリズムと様々な同一性の用法について」『日本近代文学』第66集。

鄭百秀 2007/10 『コロニアリズムの超克——韓国近代文化における脱植民地化への道程』草風館。

李郁蕙 2002/7 『日本語文学與台湾——去邊縁化的軌跡』前衛出版社(台北)。

李建志 2007/9 『朝鮮近代文学とナショナリズム——「抵抗のナショナリズム」批判』作品社。

フェイ・ユエン・クリーマン 2006/6 「戦後の日本語文学——在外日本人作家・在日外国人作家を中心に」藤井省三編『東アジアの文学・言語空間』岩波書店。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

今井祥子、「届くという遂行——日本語による営為の一面」、立教比較文明学会編『境界を越えて 比較文明学の現在』第8号、2008年3月、109-120頁。